福祉制度では応えきれない側面…

年の暮れも押し迫った日に、地域の障害児・者の支援費制度指定事業所に勤務するメル友から、【　本日は今年最後の当番勤務で、○○は正月も対応させていただいています。　】とのメール。

つい、日頃思っていることを聞いてもらいことも兼ねて、次のように返信した。

【　ご苦労様です。年末年始に休業することもなく対応することは、地域の支援事業所として素晴らしいシステムができつつあること、大変喜ばしいと思います。

地域支援の事業所等が当事者の受け入れや緊急時に対応する体制を取ることには何の異論もあませんが、ただ、年末、年始も開くデイサービス、デイケアもあるように聞きますと、利用者は本当にそのことを願ってのことなのかと思ってしまうところが私にはあります。

甥、姪、従兄などが家に来るので自分はデイサービス等を利用するとか、家にいても迷惑かけるからデイサービスをこの期間も利用する当事者もいるかに聞きます。

こうした当事者の気持ちの行く先は、バックナンバーサイト随想等関係（Ⅲ）P　2004.12.3.「時空を共有するコミュニケーションでありたい」に触れた、筋ジスの青年の家族に迷惑をかけてまで「生きていていいの？」という気持ちにつながることでないかと思ってしまいます。果たして、年末、年始に家族と過ごせないということが、こうした当事者の福祉と云えるのでしょうかね。制度だけでは応えきれない側面があるような気がします。

当事者個々の本音の心情と、いろんな福祉制度の充実をどうバランス取って行くか、大きな課題と思っています。支援費制度は、本人の意思尊重といいますが、本音の意思かどうか、周りへの気兼ねからの意思かもしれないし、どう見極めるかでね。

年末、年始、そうした本音を吐露する止まり木としての役割は、こうしたデイサービス、デイケアにもちろんあると思いますし、スタッフがそこまで踏み込んで当事者の本音の心情に寄り添おうと意識しているかどうかですよね。

「福祉制度、サービスの充実でこと足れり」ということのないように、一緒に考えて行きましょう。　】

（2005 年 1 月 13 日　記）